

一、古裂の整理

昭和三十五年度においては第九十三号興福寺古材櫃に納める布、綿、氈等塵芥中の布袋、布類断片、および第七十二、八十一乃至八十五、八十九、九十、百八号櫃絹絶類断爛、塵芥中の錦綾の断片の整理を行った。その結果は次のとおりである。

一、太孤父面袋 一口

白布、口幅六二糎、深六三・五糎、白絶紐、墨書「太孤父面東大寺」

伎楽太孤父面の袋で、内面は白絶絹入のものであつたが、今破綻して白絶僅に存しその痕跡を止めるに過ぎない。

一、芒消袋 一口

白布、口幅六五糎、深六五・五糎、墨書「芒消七十九斤八両并袋」

献物帳(種々葉帳)に「芒消一百廿七斤八両并袋及壺」とあつて本袋は同帳記載の袋に当る。今芒消を納める壺一口存し袋は既に供したものと考えられていたが、整理の布塵芥中から発見された。往時芒消はこの布袋に入れ、さらに壺中に納められていたものであろう。袋は芒消多く付着し、ために葉物に侵され糜爛甚しい。今度整理に際し付着の芒消を水に溶解してこれを取去り、その水溶液よりふたたび結晶体を

得、別に保存したが同品は芒消の壺に残存のものと同じ含水硫酸マグネシウムである。

一、丹 裏 一枚

布、堅六一・五糎、横七二・五糎、片端に墨書「丹」

一、布袋残闕 五口

一、布類断片 四十六枚

各長短あつて、白布、匱布、縹布類である。

一、古裂 帖 五冊 第五八七号―第五九二号

錦類断片四百八十一片、綾類断片七百十六片を分貼した。錦類は蜀江

錦および間道錦であつて、綾類は葡萄唐草文、八稜唐花文、双竜円文、花菱および四ツ菱文の綾である。

本年度はまた古裂断爛塵芥中より得た諸種の宝物残片を整理し曳出装重箱に納置した。これ等の諸品は宝庫の宝物の一部であつて、いつの程にか古裂類塵芥中に混入したものであろう。その主なものを左に掲げた。

一、人勝残片 三片

北倉の人勝残闕に属するもので絹本彩絵梧桐と同彩絵犬形である。

一、紫檀銀絵小墨斗残闕

中倉の紫檀小墨斗は側板一、糸纏の軸および銀の把手を明治の修理に際し各々新補して完形としたものであるが、今新補の部分に相当する旧物を発見した。

一、撥鏤飛鳥形 一枚

中倉所属の緑牙、紫牙、撥鏤飛鳥形三枚と同形のもので、象牙の染色は褪色してあきらかでない。下腹部に銀鏤が着けられている。

一、金銅押出仏 一軀

南倉の漆仏龕扉の内面に貼付してある化仏像の脱落したもので、高さ八釐、二重光背を負い蓮花坐上に跏坐し、花坐の下に蓮茎を出して基坐に接している。銅板を槌起して尊形を現わし表面に漆箔が施されている。

一、竹 鏤 六枚

中倉箭八十束のうち竹鏤のもの二束ある。この竹鏤もまた類を同じうするものである。

一、薬 物 数種

北倉所属の薬物から分離したと思われる。竜齒、竜角、竜骨、胡同律、雷丸、紫鉱、無食子、巴豆、人参等の石薬、生薬が発見された。薬名については更に専門家の鑑識を要するものである。

## 二、経巻の修理

本年度において聖語藏経巻の修理を完了したのは乙種写経第二十三

号大般若経五十七巻であつて、それぞれ旧態を存して修理を加えた。その巻末に識語あるものを掲げると左のとおりである。

卷百廿一「嘉慶二辰年卯月 泉州榮賢房書写畢」

卷百四十「嘉慶二辰年卯月 山城国奥戸人書写」

卷百四十五「文永元年六月十五日生口六十三 一門為滅罪生善也」

卷百九十九「正元元年己七月十日書写訖為沙弥寂心出離生死也沙門

(藏浦カ)

## 三、宝物の修理

本年度において宝物の修理を終えたものは左の諸品である。

一、馬 鞍 一具 第一号

鞍橋、鞍褥、韃、屢背、箆、銜、三懸等を具し宝庫の馬鞍中最も完備せるものである。鞍橋は唐鞍に類し、前後の両輪には金銀泥絵で雲文木理文の裝飾がある。鞍褥は布心で表に錦、裏に白絶を張り、韃は表に紫の色氈を張り、心は白布、蘭庭、檜葉を重ねている。屢背は心を布とし、表裏に白絶を張り赤地錦の広縁をめぐらす。箆は鉄製黒漆塗の壺箆で飛鳥唐草文の銀鏤があり、銜は痰梨銜とよばれる形式のもので鉄製、面懸、胸懸、尻懸の三懸は黒漆塗の革製で、金銅の撰蝶金具を並べ打ち、また杏葉を垂れて飾つてある。

腹帯は常陸国の調布で作られ、その一端に「常陸国茨城郡大幡郷戸主大田部虫鷹調老端」の墨書が残っている。

一、古 櫃 六合

第六号、第三十一号、第五十二号、第二百二十七号、第七百七十六号、第七百八十二号、いずれも杉材、奈良時代。

#### 四、宝物の特別調査

##### (イ) 硝子調査

硝子調査は前年に引き続き主として中倉所屬の諸種の瑠璃玉および破玉について行われた。その結果院藏のガラス玉のうち青色と紺色のものは、他の色すなわち黄、褐、緑色を呈するものに比してすこぶる軽く、鉛を含まないか、またはその含有量が至つて少いものと推定された。調査員は日本学士院会員文学博士原田淑人、日展参事各務鉦三、名古屋大学教授理学博士山崎一雄、東京国立博物館学芸部美術課長岡田譲の四氏である。

##### (ロ) 紙質調査

奈良時代における紙類の多種多様なことは当時の文献に徴しても明らかである。正倉院には御書、献物帳、宝物の曝涼出納に関する書卷をはじめ二千張に及ぶ色麻紙、絵紙、吹絵紙の類、七百数十巻に達する古文書が蔵されている。これ等の料紙を調査して、その名称、紙質、製紙技法などを明らかにするため本年度より紙質調査が行われた。調査員は甲南大学教授文学博士寿岳文章、関西医科大学教授医学博士大沢忍、京都工芸繊維大学教授理学博士町田誠之、大阪学芸大学教授理学博士上村

六郎、製紙実技者安部栄四郎の五氏である。

#### 五、聖語藏古訓点経卷の複製

本年度における古訓点経卷の複製移点を完成したものは左の三卷である。移点は奈良学芸大学教授鈴木一男氏に依頼して行つた。

一、唐 經 第九号 大乘阿毘達磨雜集論卷十四 一卷

一、神護景雲 二年御願經 第一〇号 大方広仏華嚴經卷 二 二卷

一、同 第九八号 菩薩善戒經卷 四 一卷

阿毘達磨雜集論に施されている白点は乎已止点、反点および仮名点であつて星点の限りでは後の喜多院点系に似ていて、興福寺など法相宗僧侶の加えたものであらうとされている。加点年代は明らかでないが、乎已止点が発達の極めて初期にあること、仮名字体が真仮名本位であつて略体の少いこと、及び仮名遣に上代のそれのある名残を止めている等によつて少くも平安朝初頭寛都前後のものと思われる。華嚴經の点はその系統は不明であるが恐らく東大寺において加点されたものであらうとされ、未だ流派的固定をなさず、言わば個人偶用時代ともいふべき段階のものと思われる。菩薩善戒經もまた加点年月の不明なものであるが、点法の発達程度から見て成実論天長点前後のものと同定されている。白点は殆んど読下し得る程度に施されていて、仮名づけの語彙もかなり豊富に得られるものである。

#### 六、古文書マイクロ・フィルムの作成

前年より継続中の古文書類マイクロ・フィルムの撮影は、本年度において続々修第二十二帙第一巻から同三十帙第一巻（第二十五帙第一巻および第二十六帙第三巻を除く）まで計六十一巻を了した。

#### 七、正倉院評議会

昭和三十五年度は、六月二十四日に第二十回評議会が開催され、先ず宝物の第一新宝庫移納、空気汚染調査、第二新宝庫の建築経過等について報告及び質疑が行われ、更に曝涼の方法、奈良国立博物館に於ける正倉院宝物展、宝物の特別調査等について審議された。